

### (3) 金利リスクに関する事項

#### 【リスク管理の方針及び手続きの概要】

金利リスクとは、市場金利の変動によって、保有する資産の価値やそこから得られる収益が変動することにより損失が生じるリスクのことをいいます。当組合では定期的な評価・計測を行い、適宜、対応を講じる態勢としております。

具体的には、一定の金利ショックを想定した場合の銀行勘定の金利リスクについて、「ALM管理システム」により、VaRによる定量化やBPVでの資産価値変動額の計測を行い、自己資本に対する影響等を定期的に把握しています。また毎月開催している「ALM委員会」で、リスクの状況や収益性への影響について評価と協議検討を行い、必要に応じて経営陣へ報告を行うなど、資産・負債の最適化に向けたリスク・コントロールに努めております。

#### 【内部管理上使用した銀行勘定における金利リスクの算定手法の概要】

金利リスク算定の前提は、以下の定義に基づいて算定しております。

- ・ 計 測 手 法 : 預金、貸出金、有価証券ともに「金利ラダー方式」
- ・ コ ア 預 金 : 対 象 流動性預金全般  
算定方法 算定現在残高の50%相当額  
満 期 5年以内(平均2.5年)
- ・ 金利感応資産、負債 : 預金、貸出金、有価証券、預け金、その他金利・期間を有する資産・負債
- ・ 金利ショック幅 : 観測期間5年、保有期間1年で計測される金利変動の99パーセンタイル値
- ・ リスク計測の頻度 : 月次

#### 銀行勘定における金利リスク

(単位:百万円)

項 目	19年度	20年度
金利リスクに関して内部管理上使用した金利ショックに対する損益・経済価値の増減額	864	851

- (注) 1. 銀行勘定における金利リスクは、金融機関の保有する資産・負債のうち市場金利に影響を受けるもの(例えば、預金、貸出金、有価証券等)が、金利ショックにより発生するリスク量を見るものです。当組合では、99パーセンタイル値による金利ショック幅を用いて銀行勘定の金利リスクを算出しております。
2. 要求払性預金の金利リスク量は、明確な金利改定間隔がないことから、預金者の要求によって随時払い出される預金のうち、引き出されることなく長期間金融機関に滞留する預金を「コア預金」と定義し、当組合では普通預金等の額の50%相当額を平均2.5年としてリスク量を算定しています。
3. 銀行勘定の金利リスクは、運用勘定の金利リスク量と調達勘定の金利リスク量を相殺して算定します。